



アクティブエイジング研究センターセンター長  
**近藤徳彦氏**  
(神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授)

おはようございます。只今紹介に預かりました本センターのセンター長の近藤徳彦と申します。よろしくお願いたします。本日はお忙しい中、大変たくさんの方にこのキックオフのシンポジウムに参加していただきました。実は、このシンポジウムを計画した段階で、あまり人に来ていただけないのではと心配しておりました。企業等含めて、色々聞いてみますと、アクティブというキーワードが魅力的で、是非参加していきたいということが聞け、設立シンポジウムにも何とか人が集まっていたのではないかと、今日に至りました。これだけたくさんの人に来ていただいておりますので、センターの今後の活動が益々重要になると、改めて思っております。

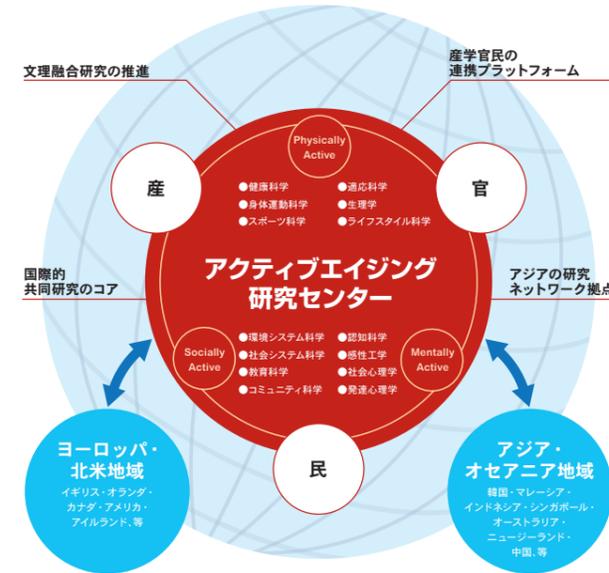
さて、今日は小川理事にも大変温かいお言葉をいただきました。ありがとうございます。今後、成果が出るように、やっていきたいと改めて感じております。また、先ほど研究科長の方からご紹介ありました3名の著名な研究者の方に来ていただいております。Thank you very much for joining today symposium. We look forward to your lectures, and also giving us suggestion and advice.

それでは、簡単に、センターを構想するにあたっての背景と、我々の思いを少し紹介させていただきたいと思っております。

皆さんもご存知のように、高齢化社会が訪れ、日本も市などいろいろな形で施策を行っております。ただそれが、十分解決の方向に向かっているかという、そうではないように思います。やはりその一つは、高齢化社会の課題が、複雑で且つ重層化しているためであると思っております。この課題を解決するためには、組織も含めて多くの領域からのアプローチが当然必要になってきます。このような状況ですので、大学としてもこれに貢献するというのは、大きな課題であると思っておりますし、先ほど研究科長からご説明ありましたように、本研究科ではいろんなリソースがありますので、この

課題に十分に対応できるということで、今回アクティブエイジング研究センターを設立させていただきました。設立にあたって、やはり何かの指針を出さないといけない、指針が重要であると思っておりました。当初はアクティブというのを外し、エイジング研究センターというのを考えておりました。そうした中で、アクティブエイジング、1999年にWHOが出した指針、「高齢者を虚弱で非生産的な社会的弱者とみる従来の固定観念を打破し、高齢期をより活動的、積極的、可能性のあるライフステージと捉えて、意識変革を起こして高齢化社会の問題を解決しよう」というものを検討してみました。1999年の指針ですけれども、現代の日本の高齢化社会にも十分通用する、というよりも、むしろ重要になってきた指針であるように思っています。この指針を我々の道筋として、アクティブエイジング研究センターという名称を付けさせていただきました。

ここからは我々の思いです。日本語名は「アクティブエイジング研究センター」ですが、英語名は「Kobe Active Aging Research Hub」という名称を使っています。当初はセンターにするかハブにするか色々議論しておりました。私自身、運動生理学・スポーツ生理学を主に教育研究を行っています。その関係でシンガポールへ伺いました時に、シンガポールのスポーツのインスティテュートというのがあり、そこが基本的にアジアのハブ、もしくは世界のスポーツインスティテュートのハブにしたいと話しておられました。その概念に感銘し、センターですが、気楽に利用できるというもので、やはり、今回我々が作る、目指すものは、このハブという名称を使ったほうがいいということで、英語でKAARbという名称を使っています。我々はこれをカーブと呼んでいます。ちょっと派手な色を使っていますが、この色とカーブのロゴを覚えていただけたら、我々にとっては助かります。アクティブエイジング研究に関わるいろんな領域が、気楽にこのセンターに立ち寄ってもらう、もしくは、相談に来てもらって情報を残していつもらった



り、そこから情報を取ってもらったり、また、私たちのいろんな研究分野と共同研究できるような、話し合える場所のイメージをしております。一方、センターですので研究成果を発信していくというのも重要ですが、それよりは、多岐に渡っております高齢化社会の問題解決のためにいろんな人にこのハブに集まっていただけだと思っています。ハブとしまして、パンフレットに詳しく載せていただいております、3つのハブを考えています。一つは、学際的、国際的、職協的で、詳しい内容はパンフレットに示しております。企業同士の接点がなかなか難しいとお聞きしますので、そういう意味でも、3つ目の職協的な考えをハブに設けたいと思っております。そしてもう一つ、小川理事から説明がございましたが、アジアのハブを目指したいと思っております。アジア諸国でも高齢化が進行していることは皆様もご存知かと思っております。これらの問題を解決するというのは、社会文化の異なる西洋よりも、やはりアジアの中で解決の方が望ましいということで、日本での施策や研究が、アジアの諸国から注目されています。このことに関して、先週、あるセミナーに参加しまして、懇親会の席で大学執行部の方で、ある企業から出向されている方とお話をさせていただきました。その時に、企業が西洋のシステム、若い人を出世させるようなシステムを取り入れて、企業の中の人間関係があまりよくなかったと。それで日本の形に戻すと業績も良くなってきたと言っておられました。その時、狩猟民族と農耕民族の違いがあるのではないかと話しておりました。我々日本人は農耕民族で助け合いを主とし

て生活しており、狩猟民族、西洋のような誰かが引っ張っていくような感じではないのではと思います。やはり近い文化のところの問題は、近い文化のところの研究で解決していかなければいけないであろうと。一方で、関西は、アジアの諸国とのつながりが大きくて、関西空港を利用するアジアの人の数が成田空港のそれ上回ったことが新聞に載っておりました。その意味でもこのセンターはアジアのハブを目指していきたいと思っております。

ここまで抽象的な話をしましたが、現在、このセンターではプロジェクトを11立ち上げています。上から、「鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して」、それから「男女の違いや個人差を考慮した健康増進支援」というように、11のプロジェクト、進んでいるもの、立ち上がったものなどで構成しています。この中の一部はポスターセッションのところで紹介しており、このカーブというサインがポスターの右側に貼ってあります。是非立ち寄っていただきたいと思っております。

多岐に渡る高齢化社会の問題点をこれだけの研究プロジェクトでは解決はできないと思っております。是非今日お越しいただいた皆様に、こういうプロジェクトの提案がある、こういう高齢化社会の問題があるという提案をたいて、さらに多くのプロジェクトが立ち上がるようにしていきたいと思っております。

最後になりましたが、今回のシンポジウムでは先ほども言いましたように、ポスターセッションを設けております。是非皆様の交流の場として活用していただきたいと思っております。最後に、全体の概念図をここに示しております。先ほど言いましたように、アジアの拠点を目指したり、いろんな分野の人との接着剤になりたいと思っております。遅くなりましたが、ここに研究領域のキーを置いております。「身体」「社会」「こころ」の3つの領域から高齢化社会の問題に取り組んでいきたいと思っております。

今日一日長いですけれども、是非活発な交流と今後のセンターのご支援をお願いして、私の挨拶に代えさせていただきます。よろしくお願いたします。